

「和国日本の自覚」・発表用レジメ

2021年2月22日・島根県松江市太陽ホール「国際Zoomシンポジウム」

＊ 島根への思い・・・日本の根っこ

○2月22日 聖徳太子の命日 法隆寺で聖徳太子の命日法要「お会式（えしき）」。

○日本古代史の特殊性と国際性

- ＊ 日本の国体は古代において最も国際化。
- ＊ 聖徳太子（574-621）・・・高麗の慧慈、百済の慧聡を側近。最高度の国際政治的見識。
- ＊ 神々の陰陽関係と神仏習合・・・全国稻荷神社の総本家・伏見稻荷や弥勒菩薩像で有名な広隆寺は渡来系の秦氏が建立。出雲大社と伊勢神宮の陰陽関係。
- ＊ 東大寺の建立は行基（百済系）や帰化人など。
- ＊ 663年、朝鮮半島で日本・百済連合の水軍と唐・新羅連合が戦闘。百済の貴族、官人ら4,000～5,000人以上が日本に亡命。
 - ・ 665年、唐の使節、254人、対馬を経て筑紫に至る。
 - ・ 日本古代氏族の系譜集成『新撰姓氏録』（810-824）。当時の有力氏族1,065の内、帰化系氏族は326氏、古代日本の上級官僚の約30%は大陸出身の家系。
 - ・ 天智天皇五年（666）、百済の男女二千人あまりが東国に居住。
 - ・ 鑑真(688-763)来日。修道体系としての仏道の基礎を確立。
 - ・ 最澄(766-822)、中国の天台宗を学ぶ。比叡山・延暦寺を建て日本天台宗成立。彼の先祖は後漢(劉氏)の孝献帝の末孫・登萬貴王で、応神天皇の御代に来日。最澄が日本天台宗を開宗。法然、親鸞、道元、日蓮、栄西ら輩出。
 - ・ 泉涌寺には1230年に宋より将来された玄宗皇帝が寵愛した楊貴妃の観音像が安置。
- ＊ 天皇の出自の曖昧・・・Cf. 現エリザベス女王の高祖母（great-great grand mother）のVictoria女王（1819-1910）はイギリス生まれだが、彼女の母と夫はドイツ人。
- ＊ 国民と国内で戦争体験の皆無（沖縄を除く）。「関ヶ原の戦い」は世界史における戦争ではない。
- ＊ 国民に国境観念の欠如。

○聖徳太子の「縁起観」にもとづく「和」の自覚とはなにか。

- ＊ 慈悲心にもとづく生命観
- ＊ 善悪の相対性の認識と人間平等観
- ＊ 日本から中華帝国～朝鮮半島を有機的に遠望する歴史認識と政治的見識
- ＊ 宗教イデオロギーを包摂する理念
- ＊ 郷土を守り、しかも国際協働する立場
- ＊ 政治における合議性
- ＊ 国政における公僕の実任の自覚

和国日本の自覚

村石恵照 muraishiesho@me.com

＊ 光輪寺住職、武蔵野大学客員教授、和国奉讃会（代表）、コラムニスト（元 Mainichi Daily News）。専門：仏教学・G.オーウェル・日本文化論

講義内容の思想的立場

「自由と秩序は人類の生態系を維持している矛盾的相互補完の原則である。自由(liberty/freedom) は個の利己性を特質とし、秩序 (order) は多の規律性を本質とする。」（「米中関係は文明の衝突か対立か対話か?」『グローバルアジア・レビュー第9号（2020.2.16）』）

米国は 西欧文明の拡張的情念の内に常に“二重義性” (1) を帯びた自由を最優先の価値観とする白人主導の新興移民大国であり、その政治情念は常に現在から未来へ拡大的に志向する時間観念に支えられている。

一方中国は始皇帝の統一以来万里の長城内に漢文明の維持してきた秩序（孔子の共同体の理念） (2) を大前提とする漢族主導の多民族からなる歴史大国である。その国体観念は過去・現在・未来に連なる歴史的時間観に基づいている。

現在、自由第一の攻勢的覇権国家の米国と国家秩序を最重視する自衛的覇権国家の中国が対立している。それら二大覇権国の間に日本は揺れ動いている。

聖徳太子の「十七条憲法」等に暗示された「和」とは、自由と秩序の融合された平等の理念であり、インドの彼岸性の霊智と中国の此岸性の叡智が列島日本の神道的感性において結晶した人類史における貴重な非覇権の平和理念である。

(1) 戦争は平和・自由は奴隷・無知は力 (WAR IS PEACE / FREEDOM IS SLAVERY / IGNORANCE IS STRENGTH) ジョージ・オーウェル『一九八四年』

(2) Asia is one. The Himalayas divide, only to accentuate, two mighty civilizations, **the Chinese with its communism of Confucius**, and the Indian with its individualism of the Vedas. Kakuzo Okakura, *The Ideals of the East*, 1903. Cf. 共産党宣言(1848)

やまとのこころ讃歌
—あこがれの日本のために—

夢をもとめてユーラシア
幾千万里さまよいて
あまたの國をめぐりきて
ついに至りし日の本の國

永い戦(いくさ)に疲れはて
なみだは枯れて身はやつれ
まほろばの里にいたりてぞ
はじめてふれしやまとのこころ

明き淨き直きこころ
あはれのこころ恋こころ
やまとのこころは和(やはらぎ)のこころ

そらごとひがごとまがごとの
あまた繁れる世のなかに
やまとのこころはまことのこころ

やまとのこころはアジアのこころ
世界にひろがる和のこころ
外(と)つ国人(ひと)と輪になって
共によろこぶ和のこころ

やまとのこころはまことのこころ
貧しきものに寄り添うこころ
まことのこころをつたえたい
四方(よも)のひとびとと分ちあいたい

平成二十六年八月十五日 村石恵照 謹識

○「やまとのこころ」

「やまとのこころ」とは、聖徳太子が深く胸に秘めていた「和とまこと」である。聖徳太子が夢殿のなかで想い抱いていたことは、人々が愚の自覚にうらづけられた「まこと」にめざめて、社会生活に実現されるべき理念としての「和」である。「やまとのこころ」は、国粋排他主義の「大和魂」とは似て非なるものである。本居宣長は「敷島の大和心を人間はば朝日に匂う山桜花」と歌った。これに対して上田秋成は「しき嶋のやまと心のなんのかのうろんな事を又さくら花」と皮肉る。宣長の「大和心」は彼なりの美学としては肯定できるが、それが排外的な偏見であってはならない。

「聖徳太子」は、「事実論」として歴史的人物であるが、「意味論」においては、神々と仏たちの宗教的意義の棲み分けと共存を歴史的に象徴的に体現している理念的人格のことであり、その後の日本の文化醸成の核心理念である。

聖徳太子は、「カミ」（複数）の宗主であり同時に仏教の信奉者である。和国のカミは自然生命の根源に関わり陰陽関係に根ざして、出雲大社と伊勢神宮がこのことを象徴している。全国稻荷神社の総本家・伏見稻荷や弥勒菩薩像で有名な広隆寺は渡来系の秦氏が建立。

ちなみに日本語の「神」の概念は混乱しているので使用にあたっては注意を要する。

カミ（ヤマト言葉）≠「神」（漢字：シン[漢音]・ジン[呉音]；「聖而不可知之、之謂神」）≠ God。

聖徳太子以後の日本の知的情念は、その深層において、親聖徳派、反聖徳派、非聖徳派に分断されていていて現在に至る。今日の日本の知的状況は、文明的見地において「やわらぎ（和）」の価値を自覚せずして、非生産的な論議・論争に泥んでいる。

○「ユーラシア」

極西にグレートブリテン島、極東に日本列島をおく広大なユーラシア大陸において、過去数千年にわたって繰り広げられてきた人類史は、各地域における歴史の諸段階の問題、特に西欧植民地主義の負の遺産を未解決のままに現代にまで続いている闘争と覇権の歴史である。

授かった命を享受せずに悲しみにくれて亡くなっていった人々は、ガンジス川の真砂の数になることだろう。ただ今も子を亡くして泣き叫ぶ母親たちの声が世界の各地から聞こえてくる。

○「國」

「國」の字は、或は城郭の形である口を戈で守る意で、武装した城邑・・・或にさらに外圍の口を加えたものが國で、もと国都をいう・・・國は国都で武装都市を意味する字（白川静『字統』）。武器を蓄えた城壁都市を原型とする「國」は、現在まで続いている国家の基本的観念である。西欧の王族が住む堅固な城と比べて、天皇の御所の驚くべき無防備性をみれば、その違いは歴然である。

日本以外の王はピラミッドの頂点に位置して軍事力をもって統治するが、天皇は伝統の円の中心に居て「和歌」を作り「稲」の豊作を祈念し、和国の国民の平安をいのるのが本務である。國から国への変化にも和の知恵が働いている。

○「日(ひ)の本(もと)の国」

今日の日本列島の原型は、氷河期には大陸と地続きであり、約12,000年前、海面が上昇して列島となった。豊かな海洋資源に恵まれ、四季が豊かに変化する緑なす山岳の列島において当初に在住の人々の間に、多様な文化的素地をともなった様々な人々が大陸と南方諸島からやってきて、やがて今日につらなる「日本人」が形成されていった。

663年に、朝鮮半島で日本・百済連合の水軍は唐・新羅連合と戦ったが、その時、百済の貴族、官人ら4000~5000人以上が日本に亡命してきた。彼らは教養と技術をもった人々であり、日本に同化して、その後の日本の文化的、技術的発展に寄与をしたことだろう。

日本の古代氏族の系譜集成である『新撰姓氏録』(810-824)によれば、当時の有力氏族1,065の内、帰化系氏族は326氏で、古代日本の上級官僚の約30%は大陸出身の家系に連なる。

日本文化のソフトウェアは、インドの精神文明(仏教+インド神話)と中国から将来された漢字、法制度、諸思想(儒教、道教)、調理技術などの融合から成り立っている。唐代に鑑真(688-763)が来日して修道体系としての仏道が確立され、その後の日本仏教の歴史的発展の基礎が築かれた。その仏道に基づいて最澄(766-822)は、中国の天台宗を学んで比叡山・延暦寺を建て日本天台宗を成立させたが、彼の先祖は後漢(劉氏)の孝献帝の末孫・登萬貴王であり、応神天皇の御代に来日した。

最澄が日本天台宗を開かなければ、法然、親鸞、道元、日蓮、栄西ら、日本人の伝統的性格を形成したような人物たちは生まれえなかっただろうし、源氏物語、能、茶道、華道、香道、歌舞伎、俳句などの「道」としての様々な日本文化の成果はありえなかった。

日本文化とは、中国文明の価値ある様々な素材を仏教の知性によって選別し、日本の社稷の保全を本来の使命とする神道的感性において洗練化して縁起的に生成されてきたものである。だからといって中華文明が世界文明の指標となる意味で特別に優れているわけではない。今日の中国の世界的な経済的台頭は、西欧の技術文明や経済思想の影響の下に実現されているものである。

○「まほろばの里」

「まほろば」は「まほらま」の転、すぐれたところ。「くに(国・國)」が政治的行政的意味合いをもつ大きな社会空間に対して、「さと(里)」は身近な生活領域であり、愛すべき「ふる・さと」である。

○「明(あか)き浄(きよ)き直(なお)きこころ」

文武天皇(683-707)の宣命に「明き 浄き 直き 誠の心を以て・・・」とある。文武天皇は皇統の始祖といわれる。文が武を治める文武一体が「やまとの国」を支える「和の国体」である。

私見によれば、このような「誠の心」の可能なかぎりの象徴的体現者として天皇の意義はある。「明き・浄き・直き・こころ」は、仏教を受容する心であり、和国の自覚の前提である。

○「和・やはらぎ」の理念

「和」は和国の最高理念として、「憲法十七条」の第一条に託された、常に生成してゆく「個の自由」と「多の秩序」の調和を内包した平等思想であり、それは和の国民の「まこと」の決意によって保たれている。

「憲法」のヤマトコトバは「いつくしき・のり」であり、「のり(法)」は「宣る」の名詞形。法的規範として、必ずそれに則すべきものをいう。「宣る」はもと神意を「告る」意で、神の定めたおきてをいう。「法」が常訓であるが、他に「倫・儀・律・徳・規・則・典」など約70字が当てられる。ヤマトコトバは漢語(漢字)無しには解説できない。

第二条「篤く三宝を敬う。三宝は仏・法・僧なり。…」は、いわゆる仏教信仰のことではない。三宝を内実とする(仏)法とは、仏教、ヒンズー教、一神教(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)の名の下に教理化され法制化された概念としての「宗教」ではなく、一切の生きとし生けるもの根源に働く調和理念である。これが、憲法第一条に「和」が第二条の仏教より上位に置かれている意義である。

第三条以下のすべての条目は、すべて第一条の「和」に集約されている。「憲法十七条」は「和」国を守る公僕のコトバである。公僕とは「私」を超えて「公(おほやけ)」のために生きる志の人である。

「和」とは宗教教理にとらわれない“柔軟思考”であり、他人を権力関係で精神支配しない自覚であり、宗教的価値は個々人の内面のことがらであるとみなすことである。組織的に人々に改宗を迫るイデオロギー化した宗教的情念や、日本においては政治的支配のイデオロギーと化した国家神道が「和」の理念にとっての最大の否定概念である。

「和」とは、諸宗教や様々な民族的イデオロギーの止揚の原理であり、日本においては民族的情念(自然への畏敬の心情にもとづく社稷の尊重精神としての神道)と普遍的人間観(仏教)の共存である。

「和」は利害的妥協や馴れ合いではない。聖徳太子は「和」国の発展的維持のため独立の気概と批判の精神を堅持した。「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」(聖徳太子の煬帝への国書)。「悪しきを見てはかならず匡せ」(憲法第六条)。

「和」とは、国家関係における平等観であり、支配・被支配の上下関係に関わらないことであり、非覇権主義である。このことは、日本以外の国々の政治について、それらの戦略は研究し理解しても、「和」国日本としては、常に各国との友好関係を維持して、隣国はもとより世界の政治に“戦略的”に参加しないことである。けだし戦略も戦術も諸行無常の世界において必ずいつかは失敗するものであるが、覇権性を帯びた戦略に関わる失敗は、「和」国の存立の基盤をおびやかすからである。

国際関係における平等観は「憲法十七条」の各条を貫いている人間の平等観にもとづいている。

○「そらこと・ひがこと・まがこと」

いわゆる国家神道は、特に西欧列強による外圧に対抗するために、徳川末期より効用が知られてきた西欧の一神教的統治原理をとり入れて、伝統的「天皇」を「天皇制」化して組み込んでいった非神道的政治イデオロギーである。

廃仏毀釈政策の導入などにより「政体」が「和の国体」の上位に位置する異質的情念へと次第に変質していった。その深刻な瑕疵は、指導的立場にある者が、さまざまな責任を祭りあげた「天皇制の中の天皇」に集約的に託して自己責任を回避する「そら・こと(虚言)」、「ひが・こと(僻事)」、「まが・こと(禍事)」、「たは・こと(戯事)」であり、「ま・こと(真実・誠)」の自覚の欠如である。

○「アジアのころろ・・・世界にひろがる和のころろ」

東大寺は、「四聖(ししょう) 建立の寺」といわれ、聖武天皇・行基(百済系僧)・ボーディセーナ(インド僧)・良弁(ろうべん・日本僧)の四人の合作である。「山鳥のほろほろと鳴く声きけば父かと思ふ母かと思ふ」は行基の歌と伝える。

○「貧しきものに寄り添うころろ」

「財あるものの訟(うつた)へは、石をもって水に投ぐるがごとし。乏(とも)しきものの訟へは、水をもって石に投ぐるに似たり。」(「憲法十七条」第五条)。ここには、共に凡夫として窮乏にある者への同情が表明されている。やまと心の「まこと」の倫理観は「弱い者いじめをするな・卑怯な真似をするな・嘘をつくな」に尽きている。

○「四方(よも)のひとびと」

これは「四海兄弟」のことである。「商これを聞く『死生命あり、富貴天にあり』。君子敬して失うなく、人と恭しくして礼あらば、四海みな兄弟なり。」(『論語(十二顔淵)』)。

これは、現世的、現実的な立場での孔子による人間の平等観を説明している。

曇鸞(476-542; 山西省出身)は「遠く通ずるに、それ四海のうちみな兄弟とするなり。」(『浄土論註』)といい、平等性を人類にまで普遍化している。

親鸞(1173-1263)は「一切の有情はみなもって世々生々の父母・兄弟なり」(『歎異抄』)といい、人間関係の在り方を共時的な平等性を包んだ通時的関係において認識している。

明治天皇は「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」(御製 明治三十七年「四海兄弟」)と謳って、日本文化の平等円の中心の責務をみずからに付託して、国家ではなく、まず国民の平安を祈っておられる。

今日までつづく覇道の世界史において、日本人は「和」国の理念を世界に誇る精神的文化資産とし、この生成的維持に努めなければならない。これが21世紀以降の日本人に託された世界に発する日本の夢・浪漫である。

(平成二十六年(2014)八月十五日初稿・令和二年八月十日改稿・令和三年二月十九日改定)